

稻 荷 前 遺 跡

富田受水場造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

群馬県前橋市は、関東平野の北西に位置し、北に赤城山、西に榛名山を望み、坂東太郎で名高い利根川が「水と緑と詩の町」を豊かに潤し、古代より上野国の政治・経済・文化的の中心地として発展してきました。

県都前橋は今、人口28万余を擁した街です。本市の水道については、昭和2年に上水道建設着工以来、市勢の発展とともに建設が進み、給水量が年々増加し続けています。特に近年は需要が著しい増加傾向にあり、富田町に造成される受水場もこれに対応するものとして計画されました。今回、それに先立つ埋蔵文化財発掘調査を前橋市埋蔵文化財発掘調査団が実施することになりました。

調査では、縄文時代前期の土器を伴う竪穴状遺構や、古墳時代の住居址1軒、古墳2基をはじめ、近世の遺構なども検出されました。今回調査した古墳は、富田地区において上毛古墳総覧に記載されていないもので、同書に記載されている他の古墳と共に、古墳群を形成していたものの一部と思われ、この地域の歴史を解明する貴重な資料を得ることができました。

この調査報告書を刊行するにあたり、前橋市水道局をはじめ多くの関係機関の方々の御理解と御協力を得たことに対し厚く御礼申し上げます。

平成8年11月10日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 中 西 誠 一

例　　言

- 1 本報告書は、平成 8 年度富田受水場造成事業に伴う稲荷前遺跡発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地
群馬県前橋市富田町27-1 番地外
- 3 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長 中西誠一）の指導のもとに、前橋市水道局の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（代表取締役 須永真弘）が実施した。
調査担当者 井野誠一・飯塚 誠（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）
　　荻野博巳（スナガ環境測設株式会社）
- 4 発掘調査期間 平成 8 年 8 月 15 日～平成 8 年 9 月 10 日
　　整 理 期 間 平成 8 年 9 月 11 日～平成 8 年 11 月 10 日
- 5 調 査 面 積 5073.29m²
- 6 出土遺物は前橋市教育委員会が保管する。
- 7 測量・調査計画…須永真弘、調査担当…荻野博巳、測量・実測…板垣宏・勝田貞幸・神津芳夫・佐々木智恵子、写真撮影…荻野博巳、安全管理…都丸保男、作業事務…柴崎信江が担当した。
- 8 本書は、調査団の指導のもと、スナガ環境測設株式会社が作成に当たり、原稿執筆を荻野博巳、編集…須永真弘、校正…金子正人・新保一美、実測図の整理他…板垣宏、遺物洗浄・注記・復元…須永豊・柴崎信江・都丸保男、遺物実測…佐々木智恵子、文章の清書…勝田貞幸、内業事務…須永豊・柴崎信江が担当した。
- 9 発掘調査に参加した方々（順不同）
石川サワ子 内山恵美子 山崎勘治 中野鶴一 飯島いし 小沼あき 新保勝太郎 佐々木智恵子 新保松乃 高橋玲子

凡　　例

- 1 本遺跡の略称は 8E34 である。
- 2 遺構名・略称
土師住居址…H 古墳…M 溝…W 穫穴状遺構…T 土坑…D 柱穴…P 風倒木…O 石…S
- 3 実測図の縮尺
遺跡全体平面図1/500 住居址1/60 カマド1/30 古墳1/40, 1/80, 1/120 穫穴状遺構・陥し穴1/60 土坑・地割れ跡・耕作跡・溝跡1/500 遺物1/3, 2/3, 1/5
- 4 挿入図は、国土地理院発行の 5 万分の 1 「前橋」を使用した。
- 5 遺跡の位置の基準 国土地理院三角点及び水準点を照合済。
基準点 A 区 A-0 地点 第Ⅸ系座標値 X 44180.000m Y-60700.000m
水準点 BM. 1 …130.000m, BM. 2 …128.500m 等高線20cm グリッド 4 m間隔
- 6 土層断面の土色名及び土器類の色調名は「新版標準土色帖」（農林省農林水産技術会議事務局 監修 財团法人 日本色彩研究所色票監修）による。
- 7 土層注記及び本文中には As：浅間山の略称を使用した。
- 8 断面図の地山部分……□、石室の裏込め部分及びカマドの天井石……■、須恵器の断面図……■を使用。
- 9 遺構の面積は、平面図による座標面積計算により算出した。

目 次

序 例 言	
凡 例	
目 次	
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と歴史的環境	1
1. 遺跡の位置	1
2. 歴史的環境	1
III 調査の経過	3
1. 調査方針	3
2. 調査経過	3
IV 層 序	3
V 遺構と遺物	4
1. 概 観	4
2. 繩文時代	4
(1) 墓穴状遺構	4
(2) 陷 し 穴	4
3. 古墳時代	4
(1) 住 居 址	4
(2) 古 墳	5
4. 近 世	6
(1) 溝 跡	6
5. 所属時期不明遺構	6
(1) 耕 作 跡	6
(2) 地割れ跡	6
6. その他の遺構	6
(1) 風 倒 木 跡	6
(2) 土 坑	6
VI ま と め	7

挿 図

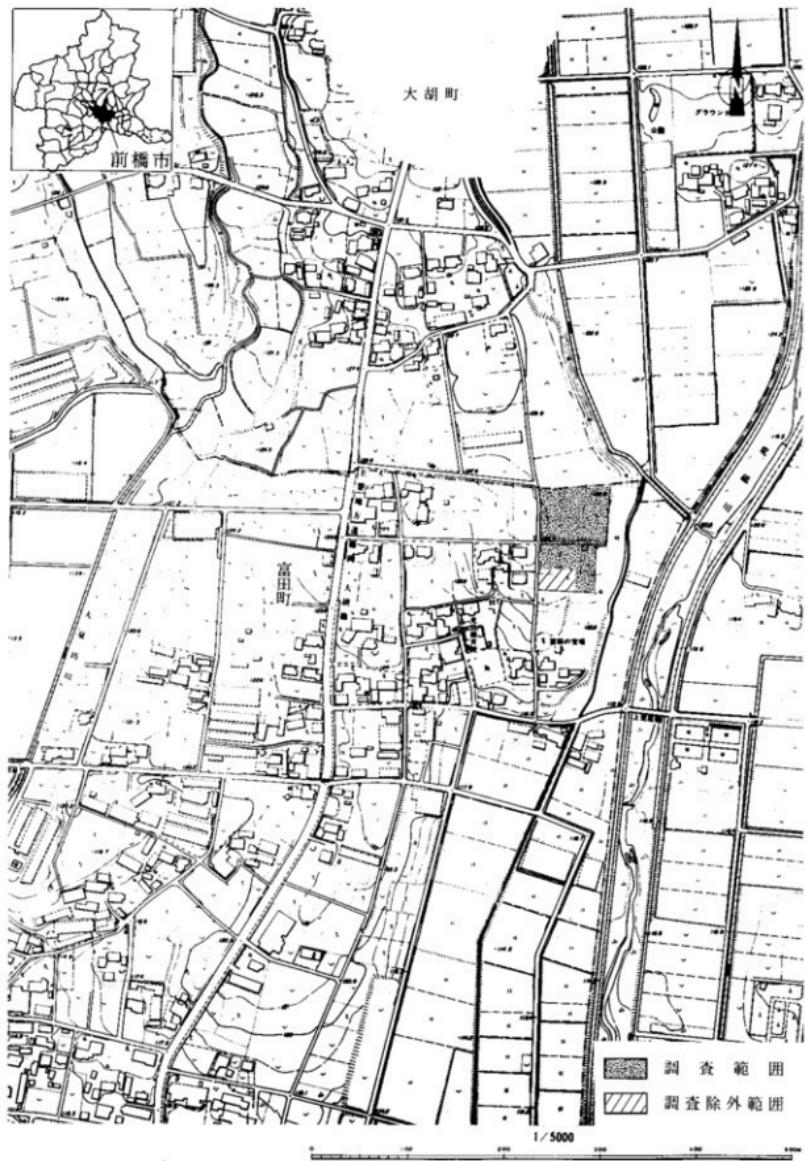
第1図 稲荷前遺跡位置図	1号古墳全体図・周堀断面実測図	12
第2図 周辺遺跡図	1号古墳石室展開図	13
第3図 発掘調査経過図	2号古墳実測図	14
第4図 基本土層図	縄文時代の遺物	15
第5図 竪穴状遺構・陥し穴実測図	縄文～古墳～平安時代の遺物	16
第6図 1号住居址実測図	稲荷前遺跡全体平面図	17
第7図 1号住居址・カマド実測図		
		11

表

周辺遺跡一覧表	2
出土遺物観察表	8

写 真 図 版

図版 1 調査前現況、作業風景、竪穴状遺構、陥し穴 (D-30)、1号住居址・カマド	
図版 2 1号住居址、1号古墳	
図版 3 2号古墳、1号溝、耕作跡、調査区全景、縄文時代の遺物	
図版 4 縄文～古墳～平安時代の遺物	



第1図 稲荷前遺跡位置図

I 調査に至る経緯

富田受水場造成事業に伴い、前橋市水道局より埋蔵文化財についての照会が前橋市教育委員会文化財保護課になされた。これに基づき、事業地内の遺跡の有無を確認するためにトレンチによる試掘調査が行われた。その結果、縄文時代～古墳時代の遺構の存在が明らかになった。当局の協議の結果、設計変更等により埋蔵文化財を保存することは不可能であると認められたため、事業地全面の発掘調査を実施することとなった。なお、事業地南西部の1457.7m²については、試掘調査の時点で、基盤層であるローム層の下部まで削平されていることが確認されため調査範囲から除外した。

発掘調査は、工事工程の関係上から前橋市埋蔵文化財発掘調査団の直営事業として行うことが困難と判断されたため、民間調査機関への委託により実施することとし、調査団と調査機関（スナガ環境測設株式会社）と前橋市水道局の三者での委託契約を締結し、発掘調査を行うこととした。

II 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置

稲荷前遺跡は、前橋市の市街地より北東へ8km程離れた、富田町27-1番地他に所在する。本地区は、昭和42年に前橋市に編入された旧荒砥村の西部を占めており、北側は勢多郡大胡町と接している。

遺跡は、赤城山南麓未端の緩やかに南西方向に傾斜する、台地上に立地しており、標高は127～129mを測る。遺跡の東側は、勢多郡宮城村北部の赤城山の荒山南面に源を発する荒砥川によって形成された沖積地が広がり、比高約10mの浸食崖によって画されている。また南側は、調査区のおよそ700m先で舌状台地の末端となるが、西侧については約500m離れて浅い開析谷が認められるが判然としない部分が残る。

2. 歴史的環境

本遺跡の立地する赤城山南麓地帯は、丘陵性の台地と沖積地が入り組んだ複雑な地形を呈しており、各時代を通じて数多くの遺跡が残されている。本遺跡周辺でも、圃場整備事業をはじめとする各種の開発が盛んとなり、それに伴う発掘調査が行われ、着実な成果を上げつつある。これらの成果をもとに、本遺跡の歴史的環境を概観しておきたい。

旧石器時代

頭無遺跡^①において、細石刃やナイフ形石器等を伴う文化層が検出されて以来、資料が蓄積されつつある。

縄文時代

草創期・早期の遺物散布が見られる荒砥北原遺跡^②、前期では鶴谷遺跡^③、中期の住居址が検出された泉沢谷津遺跡^④などがあり、草創期から中期までの遺構・遺物が見られる。

弥生時代

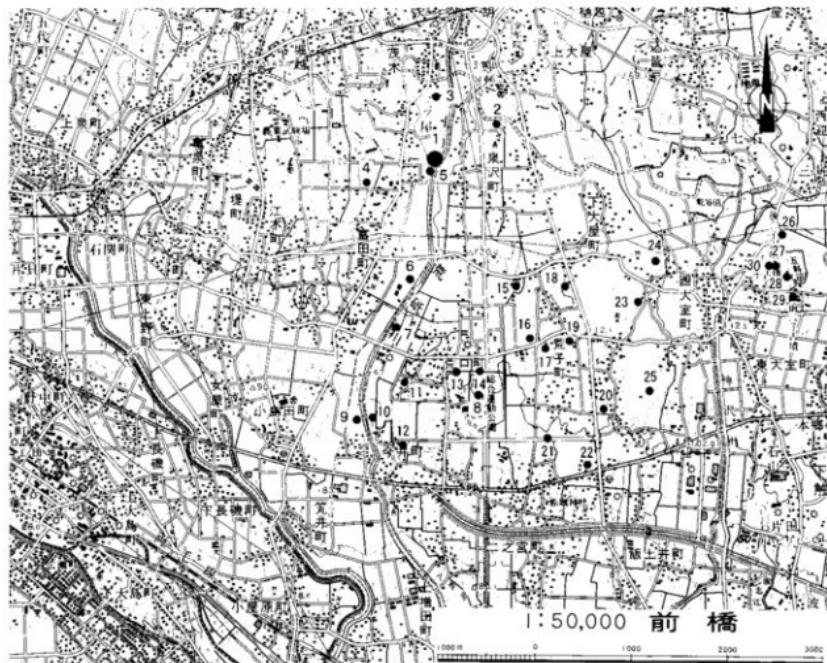
調査例が少なく、中期に荒口前原遺跡^⑤、頭無遺跡など小規模な遺跡が点在する。

古墳時代

急激に遺跡数が増加し、集落跡において前期のものは、荒砥宮田遺跡^⑥、内堀遺跡^⑦、中期では豪族居館址検出の荒砥荒子遺跡^⑧、後期では、荒砥大日塚遺跡群^⑨、荒砥中屋敷遺跡^⑩などがある。

古墳は、県下有数の密集地であり、昭和10年に行われた群馬県下第一齊の古墳分布調査の結果に拠ると、富田町においては4基の前方後円墳を含む21基の古墳の存在が確認されている。本遺跡の南側に所在する「荒砥355號墳」は、無名墳ではあるが、全長約50mの前方後円墳であり、「石櫛アリト云フ、古塔有」と記載されている。発掘調査を経ていないために詳細は不明であるが、約5mの高さを有する後円部の墳頂には、室町時代初期の「富田の宝塔」（市指定重要文化財）が建てられている。1kmほど南に下った東曲輪・東原地区における土地改良事業に伴

う発掘調査では、現存する「おとうか山古墳」の範囲確認を含め、8基の古墳調査が行われた。その結果、規模・形状が確認されるとともに特徴のある埴輪（円筒・人物・家形他）や須恵器・土師器等の出土遺物により、5世紀後半～7世紀にかけて構築された古墳とされている。



第2図 周辺遺跡図

周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	概要	No	遺跡名	概要
1	稲荷前遺跡	本遺跡	16	頭無遺跡	旧石器散布地、弥生～平安時代住居址
2	泉沢谷津遺跡	縄文時代・古墳時代住居址、古墳	17	荒砥下押切遺跡	古墳時代～平安時代住居址・円墳
3	大割5・6号墳	円墳 懸穴式石室3基	18	堤東遺跡	平安時代住居址、古墳、方形周溝墓
4	御殿山古墳	円墳 約9m調査 磁器・刀剣・骨董出土	19	荒砥中屋敷遺跡	古墳・平安時代住居址・水田柱
5	富田の宝塔	室町時代初期 中世を代表する石造物	20	荒砥荒子遺跡	古墳時代館、古墳～平安時代住居址
6	おとうか山古墳	円墳 径29m 昭和54年調査	21	新屋遺跡	古墳時代住居址 昭和41年調査
7	荒砥宮田遺跡	縄文・古墳～奈良・平安時代住居址	22	荒砥上之坊遺跡	縄文～平安時代住居址
8	鶴谷遺跡	縄文期散布地、弥生～平安時代住居址	23	阿久山古墳	前方後円墳 懸穴式石室
9	少谷塚古墳	前方後円墳 長さ50m	24	伊勢山古墳群	円墳、前方後円墳
10	荒砥北原遺跡	縄文時代住居址、奈良平安時代集落	25	丸山古墳群	群集墳7基程あったと思われる
11	荒口前原遺跡	弥生・平安時代住居址	26	内堀遺跡群	縄文包含層、古墳期住居址、平安期摸塗
12	荒砥北二木堂遺跡	旧石器・縄文期散布地、弥生～古墳住居址	27	後二子古墳	前方後円墳 約106m 平成3年調査
13	大道古墳	円墳（推定） 両袖懸窓式石室	28	中二子古墳	前方後円墳 約170m 平成6年調査
14	荒砥大日塚遺跡群	弥生・古墳・平安時代住居址	29	前二子古墳	前方後円墳 約148m 平成4年調査
15	荒子小学校校庭遺跡	古墳・奈良時代住居址	30	小二子古墳	前方後円墳 約47m 平成8年調査

III 調査の経過

1. 調査方針

市教委の試掘調査結果をもとに発掘調査を実施した。

調査区の設定は、公共座標に基づき、東西方向に延びる調査区を算用数字で、南北方向に延びる調査区をアルファベットで呼称して、 $100 \times 100\text{m}$ の大グリッドを設定し、A区・B区とし、その中を 4 m 毎に小グリッドを設定した。グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。また水準は、公共水準点に基づき調査区内に測設した。

図面作成は、 $1/10$ 、 $1/20$ 、 $1/40$ 、 $1/100$ の縮尺を使用し作図を行なった。遺物は遺構・グリッド単位で層位毎に収納し、遺物分布平面図、遺物台帳に記載し、付番処理して収納した。

また遺構・遺物等の写真撮影（白黒・リバーサルフィルム）も行なった。

2. 調査経過

平成8年8月15日より桑の木等の抜根作業や表土掘削による遺構確認調査を行ない、多くの縄文土器片や竪穴状遺構、土坑、住居址、古墳等の遺構を確認し調査を実施した。

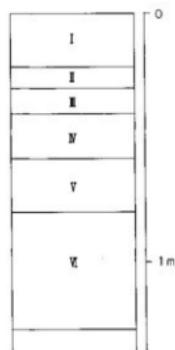
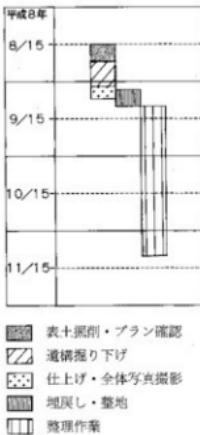
8月 重機による表土掘削後遺構確認面を精査し、遺構分布範囲を特定した。

また遺構プランが不明確な所は、遺物分布範囲にサブトレントを入れ、遺構の有無を確認した。検出した土坑や竪穴状遺構、住居址、1・2号古墳の発掘調査に入る。

9月 土坑、竪穴状遺構、住居址、1・2号古墳の調査と共に1号溝、耕作跡、地割れ、風倒木跡の調査も並行して行なう。9月10日で遺構調査と埋戻しを完了し調査を終える。

IV 層序

- I 灰褐色土層 粘性・締まりなし 細砂と軽石粒を含む
- II 黒褐色土層 粘性・締まりなし As-B 軽石を30%以上含み、わずかに軽石粒 $\phi 1\text{ mm}$ を含む
- III 黒色土層 粘性・締まりなし 細砂と As-C 軽石 $\phi 1\sim 2\text{ mm}$ を1%以上含む
- IV 黒色土層とソフトロームの混土層 As-C 軽石 $\phi 1\sim 2\text{ mm}$ を1%以下含む
- V 黄褐色土層 ソフトローム（砂質）
- VI 黄褐色土層 ハードローム 板鼻黄色軽石（As-YP）を含む



V 遺構と遺物

1. 概 観

調査を行なった結果、縄文時代の竪穴状遺構1基・陥し穴1基、古墳時代の住居址1軒、古墳2基、近世の溝跡1条や耕作跡1か所の他、地割れ跡1か所、土坑31基、風倒木跡2か所が検出された。また確認面では縄文時代の土器片が多数検出されたが、住居址は検出されなかった。

2. 縄文時代

(1) 竪穴状遺構（第5図、図版1）

位 置 調査区の北西隅 H-1号住居址の南西側

床面積 14.72m² 長軸方向 ほぼN-0°-E

形 状 圓丸方形を呈する。

規 模 長辺4.75m、短辺4.65m、平均壁高は79cmを測る。

底 面 固く締まったローム土で、中央部に焼け跡と思われる赤褐色の範囲が見られる。

備 考 確認面はほぼ円形で、中央に向かってロート状に覆土の堆積状態が見られたが、形状はそれと異なる竪穴状に掘り込まれていた。底面の南壁寄りに、長径26cm・短径22cm・深さ45cmと長径22cm・短径20cm・深さ22cmの規模を有する円形の穴を2か所検出した。位置関係や断面から柱穴の可能性も考えられる。

遺 物 確認面と底面の北西隅より、縄文前期と思われる土器片が検出された。

(2) 陥し穴（D-30）（第5図、図版1）

位 置 調査区東側のほぼ中央

方 向 長軸方向 N-80°-W

形 状 東西に長い楕円形を呈する。

規 模 径100×266cm・底径80×228cm、確認面からの深さ70cmを測る。

備 考 ローム土を掘り込んで、As-C鉱石を含む黒褐色土で埋まっている。逆茂木跡や遺物の検出はなく、時期も明確にすることはできなかったが、他の調査例から見て縄文時代の遺構と思われる。

3. 古墳時代

(1) 住居址

1号住居址（第6・7図、図版1・2）

位 置 調査区の北西

床面積 48.55m² 長軸方向 N-54°-E

形 状 東西方向がやや長い方形を呈する。

規 模 長辺7.66m・短辺7.54m、平均壁高は62.5cmを測る。

床 面 ほぼ平坦な床で、中央部はカマド前から南壁際までは堅く締まっている。中央部には、明黄褐色土による貼り床が、東西6.40m・南北2.00~4.00mの範囲で施されている。

壁周溝 カマド両側の2mほど及び北東隅の一部を除き、逆台形状の溝がほぼ壁に沿ってめぐる。規模は平均で上幅15.5cm・下幅9cm・深さ6.8cmを測るが、南側のほぼ中央はやや広くなっていた。

カマド 北壁のほぼ中央に位置する。袖が約40cmほど張り出し、燃焼部はほぼ壁際にある。袖は安山岩質の割れ石を芯材にして白色粘土で被覆して構築している。煙道部は、燃焼部よりも約50cmほど上の部分の壁を約30cmほど掘り込んでつくられており、端部は60°の角度で立ち上がっている。掘り方の壁面には安山岩質の割れ石を貼りつけ、天井部にも石を架けている。規模は、全長172cm・焚口部幅42cmを測る。燃焼部

の天井は崩壊して暗灰褐色土で埋まっている。

- 柱穴** 4か所検出した。P1は長径92cm・短径77cm・深さ48cm、P2は長径33cm・短径29cm・深さ40cm、P3は長径50cm・短径42cm・深さ36cm、P4は長径71cm・短径69cm・深さ60cmの規模を有する。P2を除く3個については、2段掘りになっている。全体の平面形状とは相違するが、ほぼ中央部に、南北方向がやや長い長方形に配置されている。柱間は芯芯で、南北方向3.85m、東西方向3.45mを測る。
- 遺物** カマド内及び北東隅に集中して出土した。カマド内には、左の袖石に寄りかかる状態ではば完形の土師器甕が上向きで残されていた他、燃焼部にはつぶれた甕の底部などを検出した。
- 備考** 西壁の中央からやや北寄りの位置に、幅63×92cm・深さ37cmの半楕円形の掘り込みがあり、南壁中央付近には、幅40×100cm・深さ14cmの床面を長方形に掘り込んだ跡が見られ、共に住居の施設に付随する掘り込みと考えられたが、はつきり断定することができなかった。また用途不明の浅い土坑、長径142cm・短径90cm・深さ12cmがP1の東側に検出されている。

(2) 古 墳

1号古墳 (第8・9図、図版2)

- 位 置** 調査区の南西 標高は128.20～128.40mを測る。
- 墳丘** 既に削平されている。外観地形からは確認不可能であった。
- 周 堀** 南側は前庭部より左右にほぼ半周し、やや角張っている。北側は、途切れが3か所あり、大きく3つの堀で構成されている。
- 規 模** 東西長17.5m・南北長18.85mを測り、周堀上幅は126～344cm・下幅40～122cm・深さは確認面より16～80cmを測り、覆土は上層にAs-B層が認められた。また前庭部前の周堀には、多量の石が落ち込んでいた。
- 主体部** 南西方向に開口する横穴式石室で、N-145°-Wの方向に開口する。石室入口部には、羨門から続く前庭部がわずかに付設され周堀と共有している。また構築方法は、自然石の乱石積を主体としている。前庭部の石積みは、左右に2段まで残り、幅は3.86mを測る。内部は、羨道部分の側壁に28～50cm程の石積みが2段まで残る。袖石は左側に25×60cm程の石を、右側にはやや飛び出した28×40cm程の石を使用する両袖形である。
- 石 室** 羨道と玄室に区分され、天井石は既に失われている。玄室側面は30～60cm程の石と小石で2段まで、奥壁は床からの石が1段のみ残る。床面は小石がほぼ平坦に敷き込まれている。石室各部の計測値は、石室長4.15m・玄室長2.05m・玄室奥幅1.1m・玄室前幅1.0m・羨道長2.10m・羨道幅0.9～1.2mを測る。石室の裏込めは、人頭大程の石と円礫を含む砂質土等を詰め込んで、やや雜に被覆している。石室構築方法は、ロームの地山を窓穴状に掘り込んだものである。
- 遺 物** 前庭部前の周堀から須恵器大甕・高杯や土師器片が、北側の周堀より土師器片が検出されている。石室内からは検出されなかった。
- 備 考** 周堀、石室等が比較的良く残り、全体の規模が20m以内と小規模である。前庭部は周堀と段差をもって区分されず、周堀との一体が見られる。羨門袖壁は左右に長く、これに交わる前庭部の側壁はない。また羨門は25～40cm程の2石と小石で塞がれ、やや羨門両袖壁の石が被さるように組まれている。羨道は狭く玄室も小さい。石積も大きい石の使用はあまり見られず、縮小化と共に簡略化の傾向がうかがわれる。群馬県埋蔵文化財調査事業団の「研究紀要10・12」の、赤城山南麓における群集墳成立過程の分析（鹿田雄三）や、前庭をともなう古墳の編年（同）と対比してみると、本古墳は、7世紀後半の古墳形態に類似し、さらに前庭部と周堀内より出土した須恵器大甕や高杯、土師器片などの形状からもその時代の特徴が見られる。また須恵器大甕の口縁部内側にはヘラ書き「サ」の文字とも記号ともとれる刻文が記されていた。

2号古墳（第10図、図版3）

位 置 調査区の南東部、標高は128.20～128.35mを測る。

墳 丘 既に削平されている。

周 堀 東南部が一部削平されているが、全周すると思われる。底は4か所に高い部分があり、掘り込みに差がある。

規 模 東西長8.86m・南北長8.82mで、周堀の上幅は80～140cm・下幅20～50cm・深さは28～50cmを測る。

主体部 検出されなかった。

遺 物 北西部の確認面と周堀内に集中して円筒埴輪片を検出し、南側にも数点検出した。

4. 近 世

(1) 溝 跡

1号溝（第13図、図版3）

位 置 調査区の南壁寄り

規 模 確認長32.2m・上幅54～115cm・下幅28～108cm・深さ5～20cmを測る。

備 考 現耕作土の下層より、As-B層や1号古墳の北東側周堀まで掘り込んでいる。底面レベルは、東側標高129.12m、西側128.38mで、東から西へ約2.3/100の勾配を持つ。

遺 物 検出されなかった。

5. 所属時期不明遺構

(1) 耕作跡（第13図、図版3）

位 置 調査区北東寄り

規 模 確認長12.8m・上幅13～30cm・下幅6～16cm・深さ5～8cmを測る。

備 考 南北方向に走行し、40～50cmの間隔で4条検出した。断面形はすり鉢状を呈する。

遺 物 検出されなかった。

(2) 地割れ跡（第13図）

位 置 調査区北東寄り

形 状 上幅25～65cm・下幅4～10cmを測り、断面形はVの字を呈する。

備 考 覆土は暗褐色土と砂質ローム土で埋まる。

遺 物 検出されなかった。

6. その他の遺構（第13図）

(1) 風 倒 木 跡

調査区の北東側と東側に2か所検出した。

O-1の規模は、径350×238cm・深さは西側で浅く30cm、東側で56cmを測る。形状は梢円形で北西に突出した部分が見られた。覆土はAs-C軽石混じりの砂質土とハードロームで埋まっていた。

O-2の規模は、径370×270cm・深さは西側がやや深く67cm、東側は56cmを測る。形状は梢円形で、O-1と同様の土層で埋まっていた。

(2) 土 坑

調査区の北から東にかけて分布し、合計31か所検出した。覆土からA・B・C群の3つに分類した。

まずA群は、As-C軽石を含む黒色土で埋まっているもので、D-1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・12・13・14・15・16・19・20・21・22・23・24・31が相当する。規模は大きいもので、D-8の径260×160cm・

深さ50cmから小さいものは、D-16・23・24の径40×40cm・深さ10cmまでがある。

B群は、黒色土とロームの混土層のもので、D-11の径160×160cm・深さ20cmとD-29の径230×110cm・深さ40cmの2基が相当する。

C群は、As-B軽石を含む黒色土で埋まっているもので、D-17・18・25・26・27・28・32が相当する。規模は大きいもので、D-28の径(220)×130cm・深さ30cmから小さいもので、D-26の径45×40cm・深さ15cmまでがある。

上記で分類した点の他に、配置や大きさなどから見ても、相違が多く、性格や用途は特定できなかった。

また、D-10からは、平安時代の土師器壺が1点完形で出土している。規模は、径136×178cm・深さ72cmを測る。性格・用途は不明である。

VII まとめ

縄文時代では、遺構確認面で前期諸戦式から後期称名寺式までの土器片と石器類が多く検出された。また、焼けた石や礫なども若干見られ、生活の痕跡と思われたが、陥れ穴と竪穴状遺構を検出したのみであった。

また古墳時代では、住居址を1軒検出した。規模が比較的大型でカマドの構築方法も、見事に石と粘土を使用して巧妙に作られていた。また、1号古墳との距離が28m程と近く、古墳の出土遺物と住居址の出土遺物からも7世紀後半の特徴が見られるなど時期的に近く、そこの人々が古墳にかかわった可能性も考えられる。

今回は、1軒のみの検出であったため、集落の一部であるのか、また調査区域外に住居址が存在するのか不明であるが、今後の調査でその成果が得られよう。

古墳については、1、2号古墳共に、盗掘等や削平により保存状態は良好とは言えず、全体を把握することはできなかつたが、本遺跡の2基の古墳が、富田町やその周辺地域の歴史を解明するうえで、新たな糸口となることを期待したい。

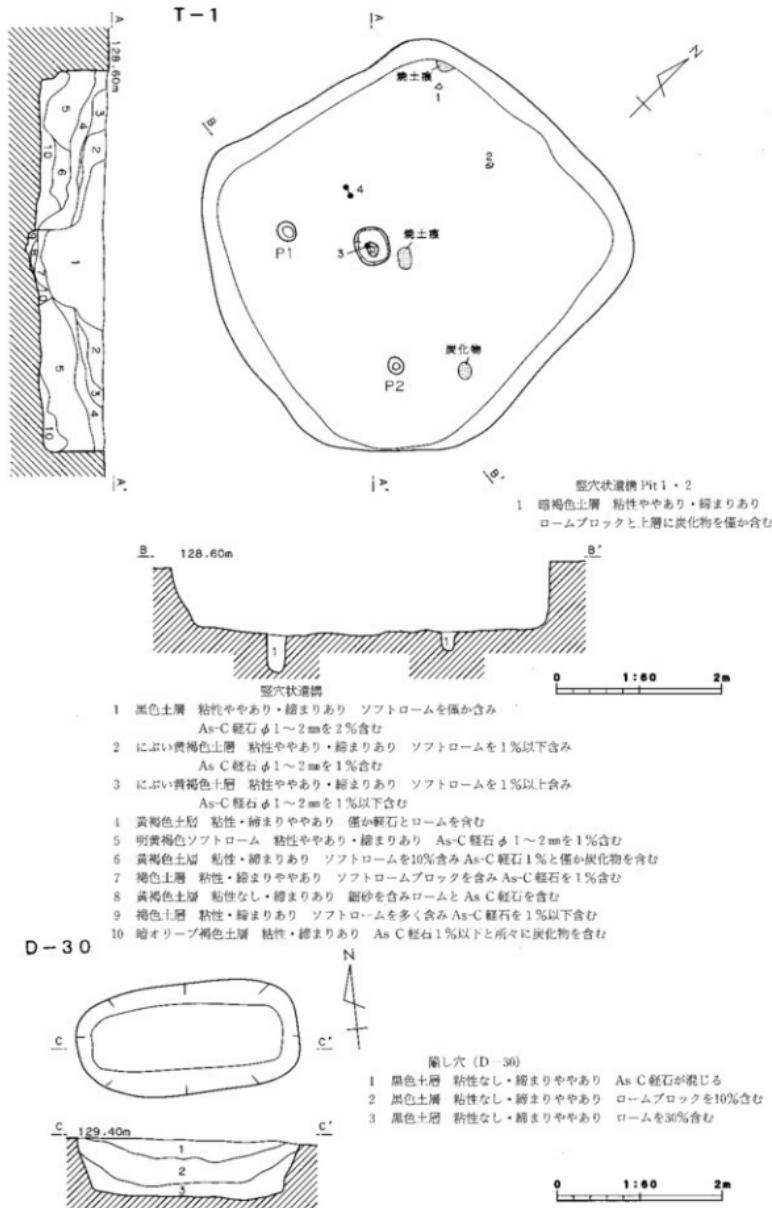
参考文献

- 芳賀団地遺跡群 第3巻 芳賀東部団地遺跡Ⅲ -縄文・中世編- 1990.3 前橋市教育委員会
柳久保遺跡群Ⅰ 1985 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
II III 1986 II
II V 1988 II
内堀遺跡群Ⅳ 1991 II
富田遺跡群 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査報告書 1980 前橋市文化財研究会
横依遺跡群Ⅳ 1992 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
堀越芝山遺跡 1996 群馬県勢多郡大胡町教育委員会
奥原古墳群 1983 群馬県教育委員会 鶴群馬県埋蔵文化財調査事業団
塙堀り古墳群 1980 群馬県教育委員会
糸井宮前遺跡Ⅱ 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第14集 1986 群馬県教育委員会
他群馬県埋蔵文化財調査事業団
研究紀要 10 1992.11 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
研究紀要 12 1995.3 II
和泉陶邑窯の研究 須恵器生産の基礎的考察 中村浩・著 柏書房
古墳時代の研究 11 地域の古墳Ⅱ 東日本
前橋の文化財 前橋市教育委員会
群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編) 群馬県文化財保護協会

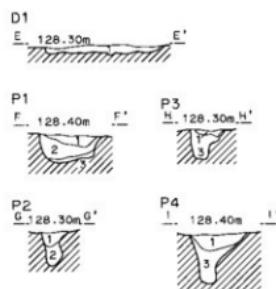
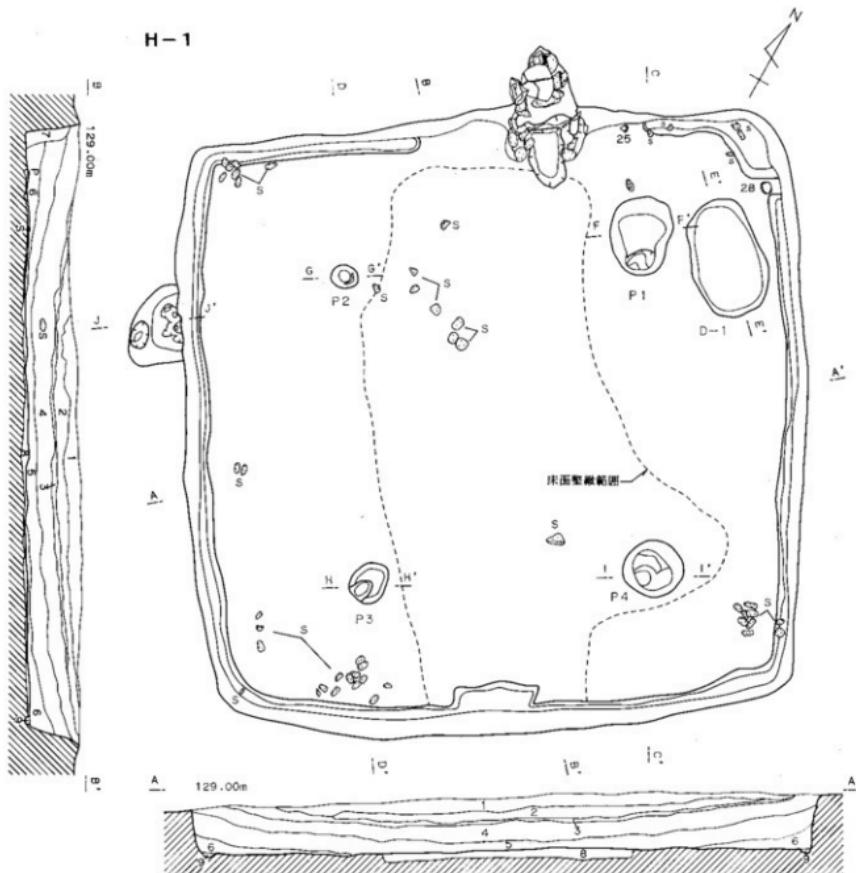
出土遺物觀察表

注：法規は①口徑②肩部最大径③腰部径④器高⑤長さ⑥紐⑦厚み⑧穿孔をmmで⑨重量をgで表し、()は推定値を示す。

番号	出土地点	形態(種)	法量	①胎土・②焼成・③色調・④残存	器形・製作技術の特徴
1	整穴状遺構 底面	縄文土器		①密。雲母・蛭石・良好③によい 赤褐色YTR7/6(断片)(口縁)	口縁上端に4-5による斜位の刻み有り。外面SLRを基準とする。
2	整穴状遺構 底面	縄文土器		①密。雲母・蛭石・良好③後黄2. 5YR7/4(断片)(口縁)	わざかに波状を呈する口縁。
3	整穴状遺構 壁面裏面	縄文土器		①密。蛭石・良・真白③によい 赤褐色2.5YR4/4(断片)(口縁)	波状口縁。外側竹管による收縫を口縁部に4条進す。下端から口縁に3条の斜縫。広い部分に瓶底の施文施加。縫いやかな波状口縁。
4	整穴状遺構 底面裏面	縄文土器		①密。雲母・蛭石・良好③によい 赤褐色2.5YR4/4(断片)(口縁)	波状口縁。外側竹管による收縫を口縁部に4条進す。下端から口縁に3条の斜縫。広い部分に瓶底の施文施加。縫いやかな波状口縁。
5	AE-18グリッド	縄文土器		①密。真白・良・良5.YR7/6(4) 断片(1脚)	口縫部からやや斜竹管により3条の四脚を引く。
6	AE-7グリッド	縄文土器		①密。蛭石・雲母・良好③橙5 YR6/6(断片)(口縫)	細い竹管で口縁に平行な弦線をめぐらし、下方は棘杉状の弦線文。
7	AG-16グリッド	縄文土器		①密。石英・蛭石・鮮石・良好③ 明赤褐色2.5YR6/8(断片)(口縫)	波状口縁。細い粘土紐を貼りめぐらした浮縫に、ヘラによる跡みを残す。
8	AM-4グリッド	縄文土器		①密。輝石・雲母・蛭石・良好③ 橙5YR6/6(断片)(口縫)	口縫に平行な施文を引き、削部に平行弦線をめぐらす。口縫部にへたによる斜縫を施す。
9	AL-6グリッド	縄文土器		①密。雲母・石英・長石・良好③ 橙5YR6/6(底面)	平底。地文に施文を施す。その上に5~6条の櫛形工具による平行弦縫を施す。
10	AG-16グリッド	縄文土器		①密。雲母・蛭石・良好③律7.5 YR7/6(断片)(口縫)	上下を2条の平行弦縫で区画し、その中を貝殻背疊による押文を施す。
11	AG-16グリッド	縄文土器		①密。雲母・蛭石・小石・良好③ 明赤褐色2.5YR6/6(1脚)断片	平底竹管を小刻みに引いた施文。
12	AG-5グリッド	縄文土器		①密。雲母・蛭石・長石・良好③ によい橙2.5YR7/4(口縫)	竹管による平行弦縫。
13	AE-16グリッド	石 繖	⑤3.7⑥1.2⑦0. 402.56	石質：チャート④完形	鋭い先端を持つ。凸基無茎縫。
14	AH-10グリッド	石 錐	②.5⑥1.6⑦0. 6⑦1.76	石質：黒色真岩④完形	左右対称。平底無茎縫。
15	AK-11グリッド	石 錐	②.7⑥1.7⑦0. 4⑨.89	石質：チャート④ほぼ完形	基部は丸い。基部の一端欠損。凹基無茎縫。
16	AR-10グリッド	石 錐	②.7⑥1.8⑦0. 391.53	石質：珪質真岩④完形	基部丸い。凹基無茎縫。
17	AG-8グリッド	石 鋸	⑤.8⑥5.9⑦0. 703.29	石質：黒色真岩④完形	
18	AH-11グリッド	石 鋸	⑤.0⑥7.2⑦0. 924.33	石質：真岩④完形	
19	AN-5グリッド	分離式斧石	⑨.3⑧8.0⑦1. 2995.23	石質：黑色真岩④完形	
20	AK-2グリッド	分離式斧石	⑪.1⑧6.8⑦4. 1.89245	石質：真岩か④完形	
21	AM-8グリッド	磨製石斧	⑨(9.9)⑦.8⑦. 3.79460	石質：緑色蒙岩④1/2	
22	AF-8グリッド	敲 石	⑤(12.9)⑥.6⑦. 9⑨425	石質：浮石安山岩④1/3	先端部敲痕。
23	AF-17グリッド	円錐石錐	⑨.3⑨.9⑩.7⑩. 294918	石質：浮石安山岩④完形	両面使用痕。
24	AM-10グリッド	凹 石	②.6⑥6.7⑦. 4.70290	石質：砂岩か④ほぼ完形	両面凹石。両面擦痕あり。
25	H-1	土師器 坯	①(12.8)④.4.3	①標査。雲母・真白②良好③に よい黃褐色YTR7/4④L/3	外側口縁部から斜直下に及ぶ横ナデ。底部に鉢底あり。 体部は「丁寧なへら削」。内面側付着。口縁部から体部に かけて横ナデ。底面へラフ。
26	H-1カマド	土師器 墓	②1.2④(35.0)	①標査。雲母・石英・輝石・真白 ②良好③橙2.5YR7/6④底部欠損	外側口縁部横ナデ、体部へラフ削り。内面口縁部横ナデ、 脇部へラフ削り。
27	H-1カマド	土師器 墓	④(15.0)残存高	①密。雲母・蛭石・真白 ②良好③橙2.5YR7/6④側部 底部	底部の底盤に上部を付け足した造り。外側体添へ底部 へラフ削り。内面体添へラフ削り。剥離あり。外側一次 焼成痕あり。
28	H-1	土師器 坯	①(11.4)④.3.5	①標査。輝石・雲母・石英②良好 ③橙5YR6/6④ほぼ完形	丸底蒸形で残い良部と外反する口縁部を持つ。外側は 口縫横模様ナデ。体部はへら削り。内面口縫部横ナデ。 底部へラフ削り。
29	M-1	須恵器 坯	①(27.2)④(3. 5)残存高	①標査②良好③灰5Y5/1④60%脚 部欠損	底盤から内部へ剥離する浅く大深な环状。口 縫横模様。武器記述→調整後・脚部半ちへラフ削。接合部付跡が残る。右回転クロス切痕。
30	M-1前庭底前 須恵器 大臺		①26.7②43.9③ 17.8④48.8	①標査②良好③灰5Y4/1④ほぼ完 形	丸底。中心部を較大として肩部が大きく張る。口縫部 は直線的に開き狭くなる。中位に波紋状。口縫部に へラフ削りあり。内面半円凹削記号。口縫部指標止め。 内外側自燃熱。
31	M-1 前庭部	土師器 坯	①(11.5)④.3.3	①密。黒雲母・蛭石・石英②良好 ③橙5YR6/6④ほぼ完形	底盤の底部から脇く内側する口縫部。外側口縫部横ナ デ、体部へラフ削り。内面口縫部横ナデ。体添へラフ。 内外側口縫部に保付する。
32	M-2	円筒埴輪		①標砂粒を含む。②良好③橙5 YR6/6④断片	外側。網目状。坐姿位の指標で、内向、上から縱位の 指標で。上段に透視の一面あり。
33	M-2	不 明	②.1⑩.0⑩.9⑩. 600.692.18	石質：黑色珪質真岩か④完形	油滴分りあり。両面からの穿孔痕。
34	D-10	土師器 坯	①13.8④.3.3	①標査。黑雲母・石英・蛭石②良 好③明赤褐色5YR6/6④光形	浅い平底気味の底盤から緩やかに内側する口縫部。外 側口縫部横ナデ。体部へラフ削り。内面口縫部横ナデ。 底部へラフ削り。外側向付痕。



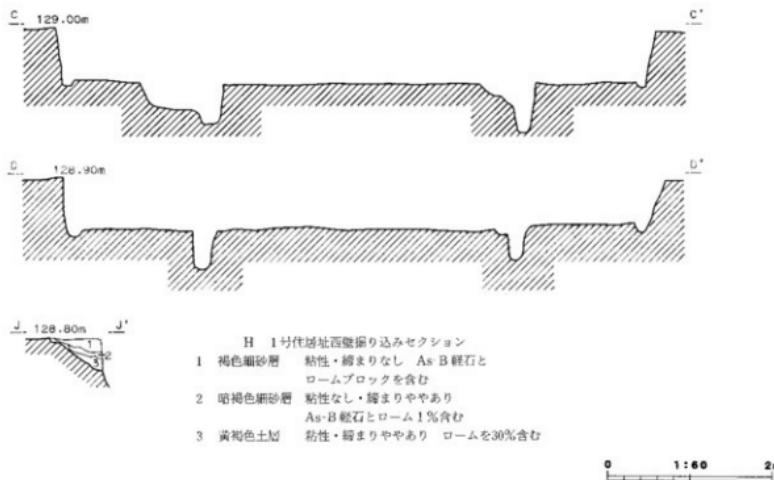
第5図 積穴状遺構・陥穴実測図



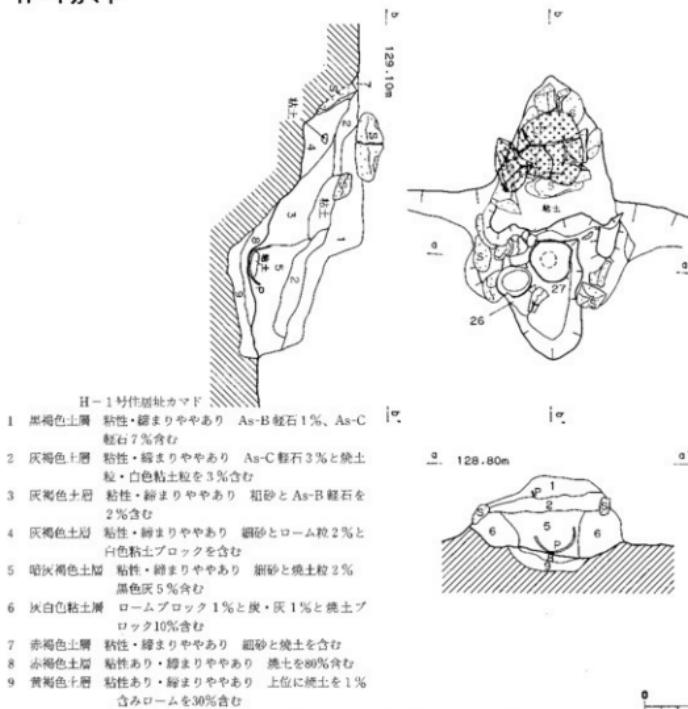
- H-1号住居址
1. 褐色砂質土層 As-B 錫石を多く含む
2. As-B 錫石層 As-B 灰岩をブロック状に10%含む
3. As-B 錫石層 黒色土をブロック状に含む
4. 黑色土層 粘性ややあり・縛まりあり As-C 錫石 ϕ 2mm以上を1%含む
5. において黄褐色土層 粘性ややあり・縛まりあり ソフトロームを多く含み僅か黒色土とAs-C錫石を含む
6. において黄褐色土層 粘性ややあり・縛まりあり 褐色土とソフトロームを含む
7. 黄褐色土層 粘性なし・縛まりややあり As-C 錫石と褐色土を含む
8. 明黄褐色土層 粘性・縛まりあり 黄白色粘土60%とロームブロック・黒褐色土を含む
9. 黄褐色土層 粘性・縛まりややあり ソフトロームを30%含む
- H-1号住居址 D-1, Pit 1~4
1. 褐色土層 粘性・縛まりなし ロームとAs-C 錫石を含む
2. 褐色土層 粘性・縛まりなし ロームとAs-C 錫石を1%以上含む
3. において黄褐色ローム土層 粘性・縛まりややあり 褐色土を1%含む

第6図 1号住居址実測図

0 1:50 2m

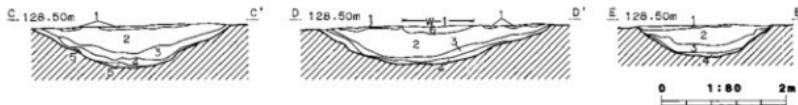
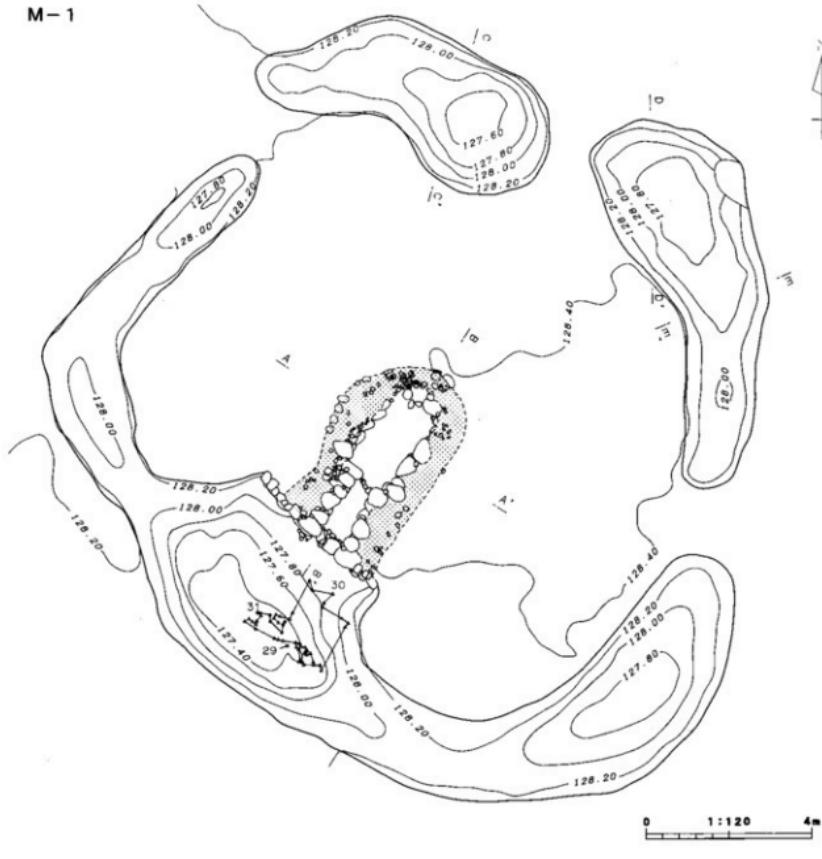


H-1カマド



第7図 1号住居址・カマド実測図

M-1

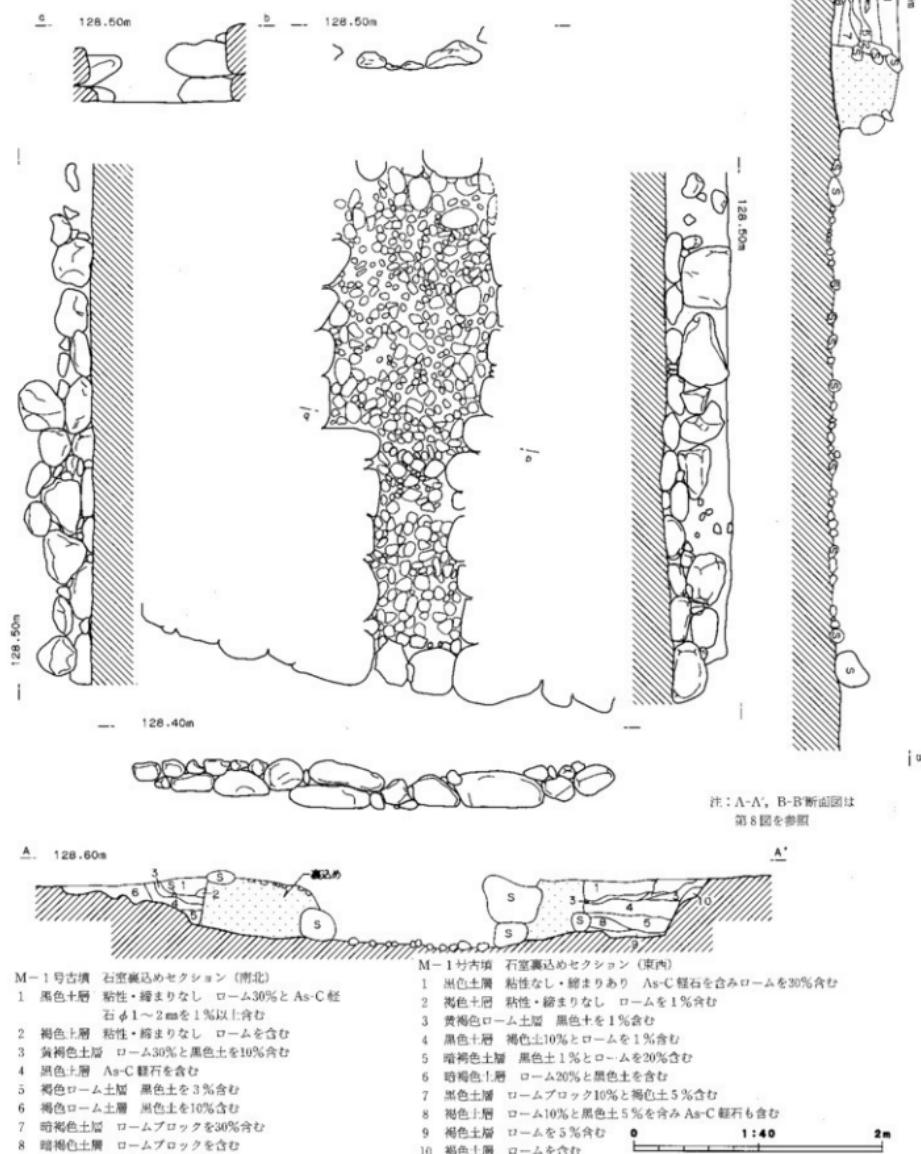


M-1号古墳 周囲

- 1 As-B 鉱石層 黒色土を僅か含む
- 2 黒色土層 粘性なし・締まりあり As-C 鉱石 $\phi 2 \sim 3\text{mm}$ を1%以上含む
- 3 棕色土層 粘性ややあり・締まりあり 黒色土を多く含みロームを僅か含む
- 4 黄褐色土層 粘性なし・締まりあり ロームを多く含み褐色土と As-C 鉱石を含む
- 5 棕色土層 粘性・締まりややあり 黒色土とロームを僅か含む
- 6 深褐色砂質土層 As-B 鉱石 1%以上含み僅か As-C 鉱石を含む
(W-1が周囲を掘り込んでいる)

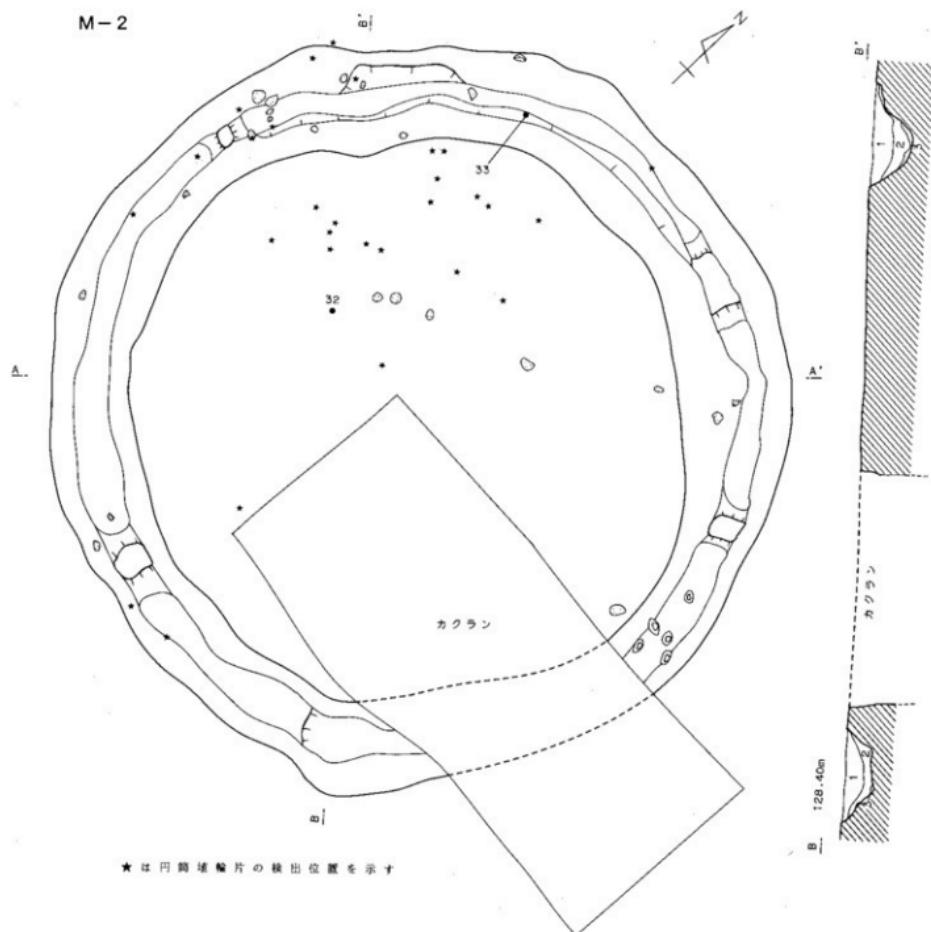
第8図 1号古墳全体図・周堀断面実測図

M-1 石室



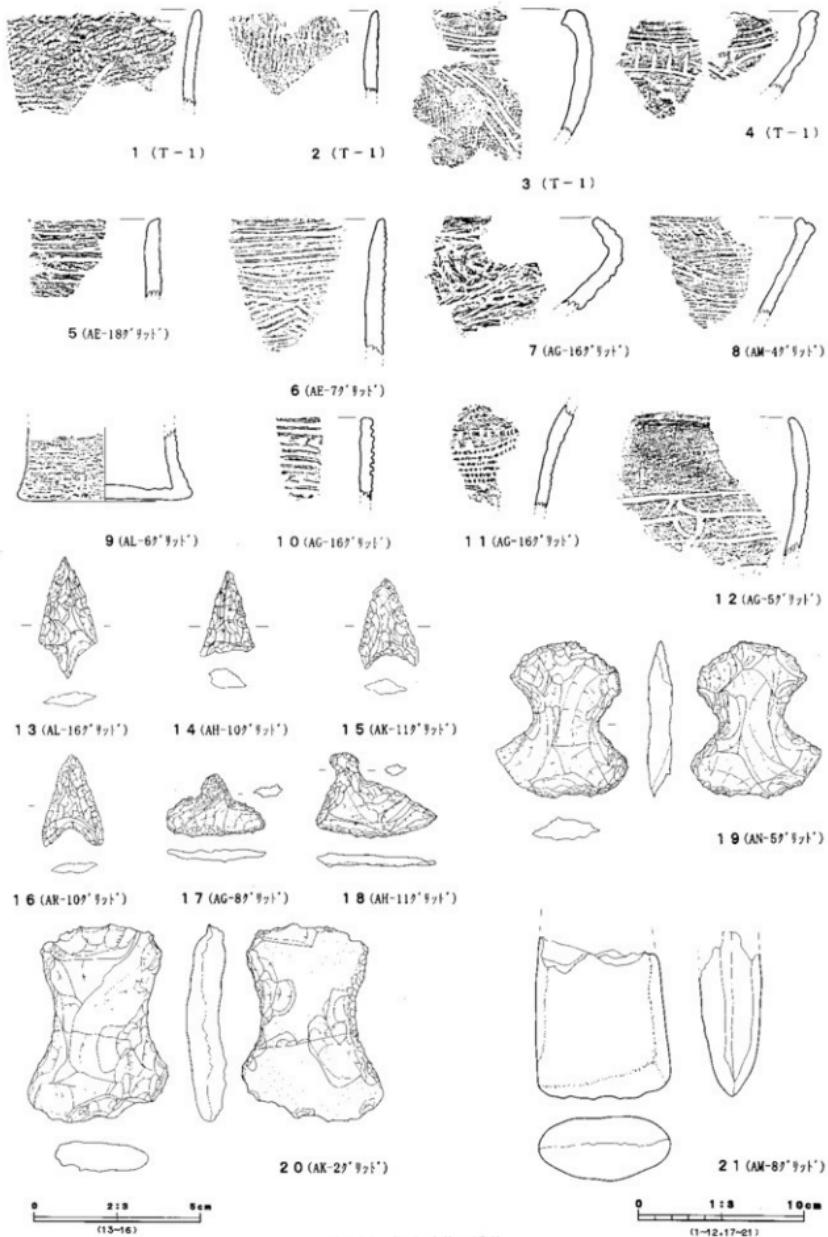
第9図 1号古墳石室展開図

M-2

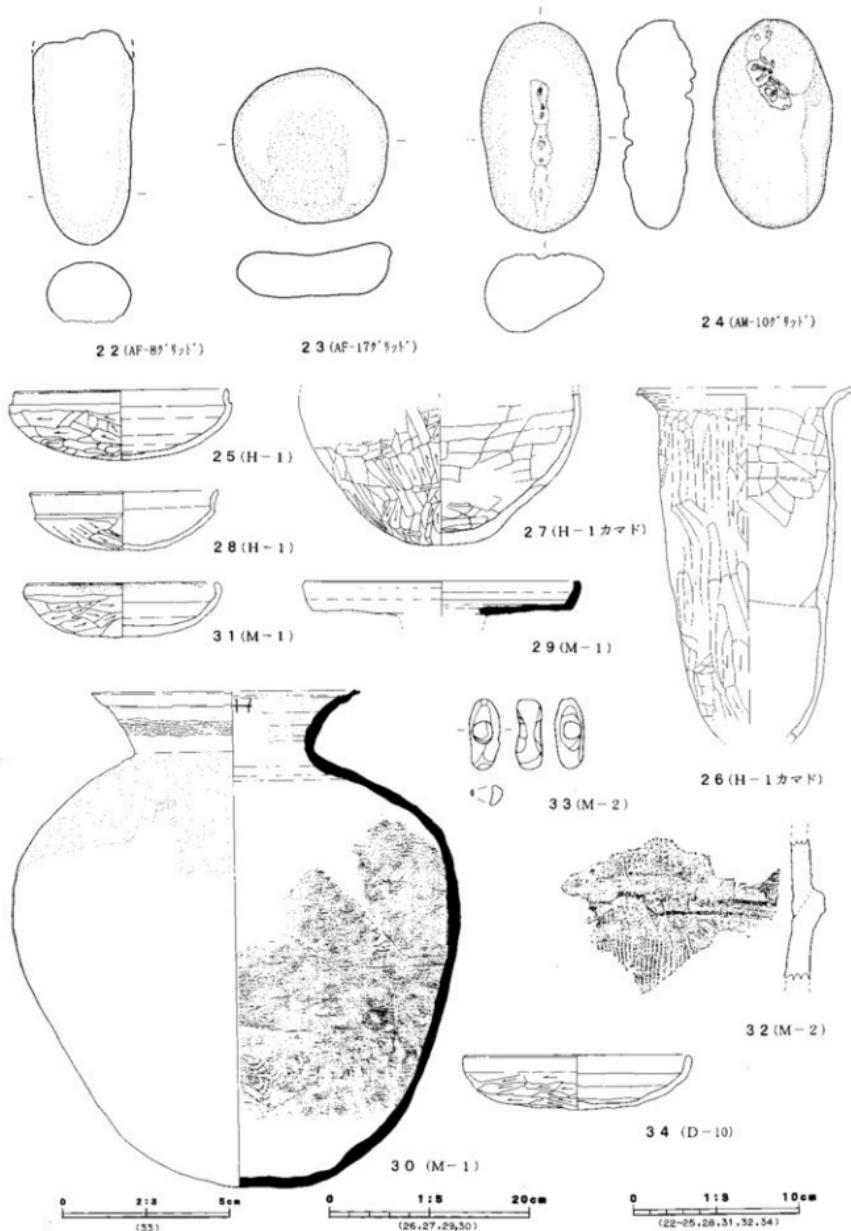


0 1:60 2m

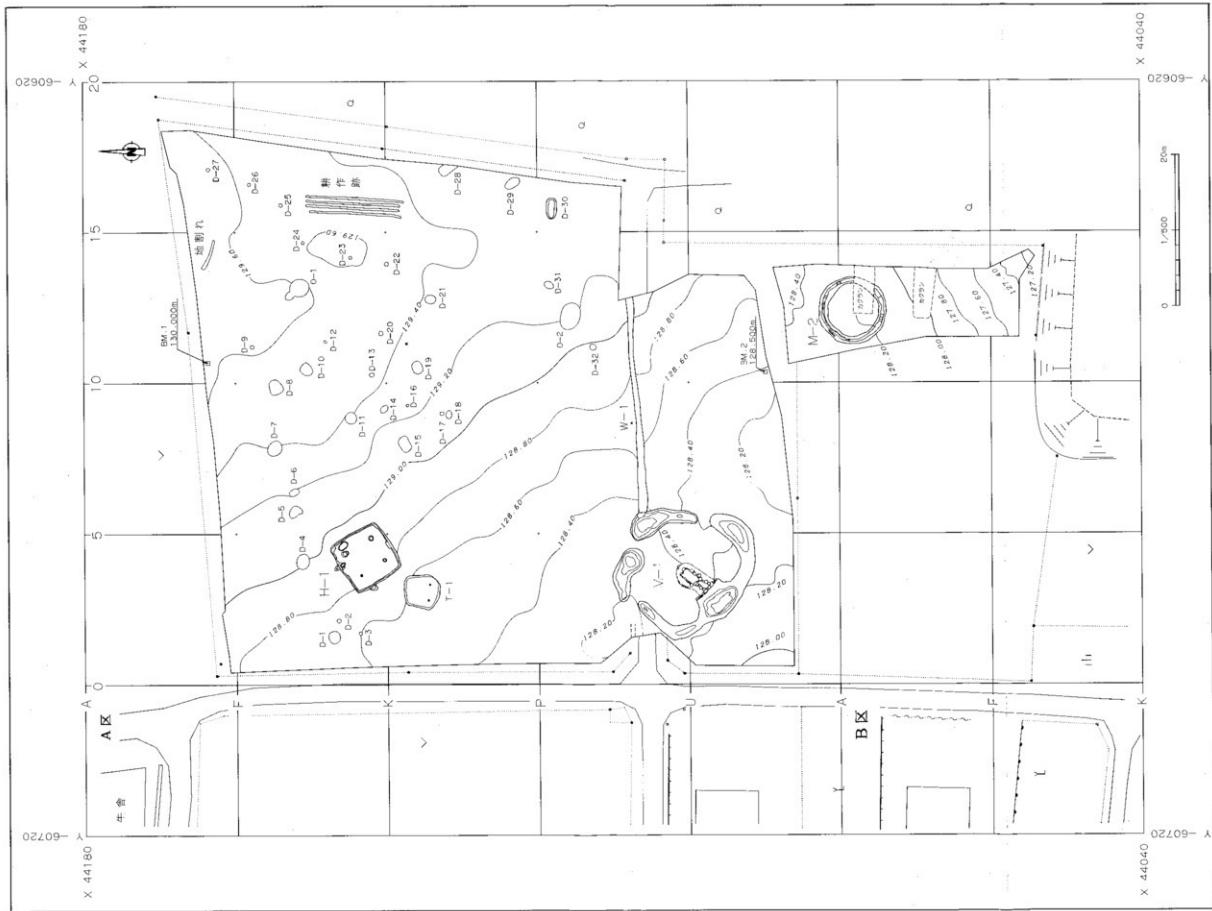
第10図 2号古墳実測図



第11図 鏑文時代の遺物



第12図 繩文～古墳～平安時代の遺物



第13図 稲荷前遺跡全体平面図

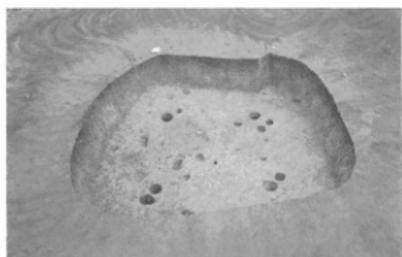
写 真 図 版



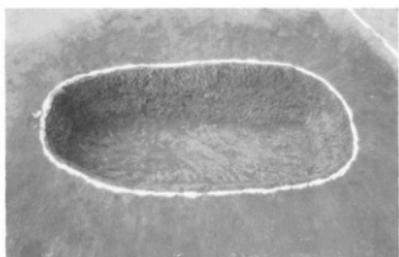
調査前現況



作業風景



堅穴状遺構



陥し穴 (D-30)



1号住居址



1号住居址カマド遺物出土状況

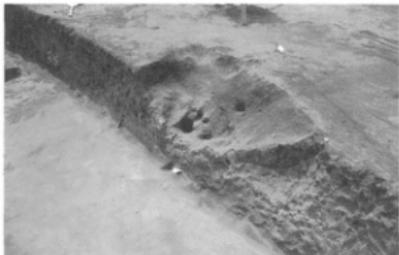


1号住居址カマド



1号住居址カマド (東より撮影)

图版 2



1号住居址西壁掘り込み部分



1号住居址掘り方



1号古墳全景



1号古墳前庭部遺物出土状況



1号古墳澳門状況



1号古墳狭道部石組状況



1号古墳石室石組状況



1号古墳石室全景



2号古墳全景



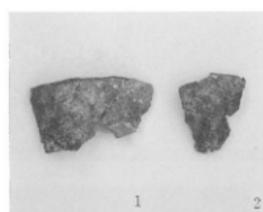
1号溝全景



耕作跡全景

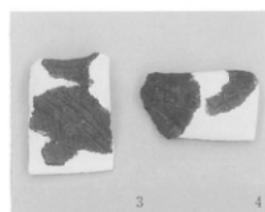


調查区全景



1

2



3

4



5

6



7

8



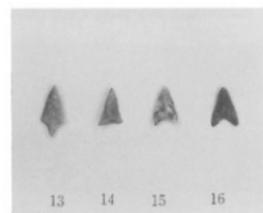
9



10

11

12



13

14

15

16



17

18



19

图版 4



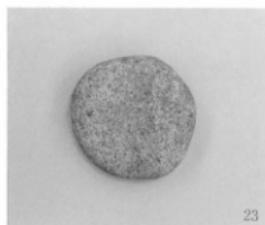
20



21



22



23



24



25



26



27



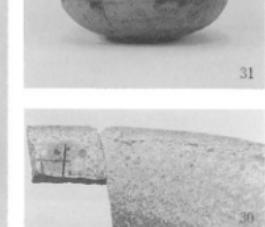
28



29



30



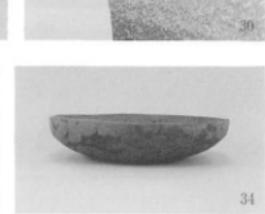
31



32



33



34

抄 錄

フリガナ	イナリマエイセキ
書名	稲荷前遺跡
副書名	富田愛水場造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ	
編著者名	スナガ環境測設株式会社 萩野博巳
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371 群馬県前橋市上泉町664番地の4
発行年月日	西暦1996年11月10日

フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所在地	コード	位 置		調査期間	調査面積	調査原因
イナリマエイセキ 稲荷前遺跡	アエバシレントヨウ マチ 前橋市富田町	10201	8E34	36°23'44" N 139°09'25" E	19960815 19960910	5073.29m ²	愛水場造成事業

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
稲荷前遺跡	竪穴状遺構	縄文時代	竪穴状遺構1か所	縄文時代前期の土器
〃	土坑	縄文時代	陥し穴 1基	
〃	集落跡	古墳時代	住居址 1軒	土師器壺・長甕
〃	墳墓	古墳時代	古墳 2基	土師器壺、須恵器大甕・高壺、埴輪片
〃	溝跡	近世	溝跡 1条	
〃	耕作跡	不明	耕作跡 4条	
〃	地割れ跡	不明	地割れ跡 1か所	
〃	土坑	不明	土坑 31基	
〃	風倒木跡	不明	風倒木跡 2か所	

稲荷前遺跡

1996年11月5日 印刷

1996年11月10日 発行

発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664番地の4

編集 スナガ環境測設株式会社
前橋市青柳町211番地の1

印刷 朝日印刷工業株式会社

